

VIEW OF HEREAFTER AND DEATH IN ISLAM IN COMPARISON WITH JAPANESE BELIEFS

İDRİS DANIŞMAZ*

ABSTRACT

It is not an exaggeration to say that contemporary society has been going through one of its hard times in witnessing heavy casualties by either man-made disasters such as internal wars and conflicts or by recent large-scale natural disasters occurring throughout the world. The case of the civil war in Syria has been the biggest humanitarian crisis in our times, in terms of the number of casualties that is estimated to reach half a million, which equals approximately 10 % of the total population of the country (as of February 2016), according to a survey¹. In Japan, which had been believed to be one of the countries most prepared for earthquakes, especially for Tsunami, 18,456 people (including those missing) lost their lives in the “Great East Japan Earthquake”, which occurred on 11th March 2011.

During and after such major events, one of the challenges is how to face the social and physiological effects of large numbers of deaths, and cope with the grief of individuals caused by the loss of their loved ones alongside with the physical damage caused by the disasters. In such circumstances, “View of Hereafter and Death (hereinafter ‘VHD’)” can help the war bereaved people and disaster survivors when dealing with the pain of the deaths of other people. It may also help individuals in coping with how to live with fear of their own death.

1 It is very difficult to estimate the exact death toll of Syrian crisis since the UN stopped giving the exact number of fatalities in August 2014, and gave the last estimation in August 2015 as “more than 250,000”. The figure given here is based on “470,000 casualties” claimed by “Syrian Centre for Policy Research (SCPR)”, a non-profit organization, in February 2016 at a conference in Beirut. Arabic video of the event can be seen in the link below:

<http://scpr-syria.org/events/launching-workshop-of-the-confronting-fragmentation-report/>

* Doshisha University, Kyoto, Japan idris61@hotmail.com

VHD, as a descriptive term, can be defined as a thought or belief system which includes answers to the two difficult questions of the humanity, which are: 1) what is mankind (origin of human being), and 2) where do humans come from and where are they going after death?

Although many people rely on the knowledge provided by VHD, the understanding of VHD varies from religion to religion, and its explanation differs from time to time, especially after big events or accidents in a certain society. Hence, the view of life and death among the victims of the conflicts in the Middle East today and the survivors of the big disasters might have changed. However, this paper will not deal with the perspectival transformation on VHD since the process is ongoing and all dimensions of perception cannot be grasped now until case studies on different societies and fieldwork researches on different areas are done in the future. Instead, this paper attempts to shed light on VHD in Islam in comparison with Japanese people in general in order to infer how the war bereaved people of the Middle East and the disaster survivors in the post-Great East Japan Earthquake society in Japan might deal with the deaths of large numbers of people in general, and of their family members in particular.

This paper consists of four chapters excluding the introduction and conclusion. The first chapter presents the definition of VHD in general, and the diversity of the notion of life, death and hereafter in relation to the cultural and religious difference, and even time difference. The second chapter deals with VHD in Islam and in Japanese beliefs, and rough comparison between them. The third chapter — “Life after death” — further describes different beliefs about death and especially life after death through the case of Islam and Japanese people. The final chapter discusses the “reality” of hereafter in VHD.

It can be said that this paper provides an overview of VHD in Islam and Japanese beliefs. Some of the primary findings from the research of this paper can be summarized as follows:

Firstly, the reality or existence of the hereafter notion is recognized by the Japanese religions (Buddhism and Shinto) in general the same way as Islam does, despite some major or minor differences in the explanation of hereafter among them.

Secondly, despite fear of death and worry about hereafter, Japanese people as well as Muslims tend to become positive about life and death after thinking and talking about death. On the other hand, as some surveys reveal, the majority of Japanese people neither believe in the life of hereafter, nor have interest in the notion of hereafter per se. However, since VHD can contribute positively to the world view of individuals, and even help to build up morality of the society, mitigating this indifference is the task that this monograph tries to attract the attention of all interested parties to, and come up with a solution for. Otherwise, there might be risks of disorder in society and erosion of values in case of unconvincing VHD, which may cause the loss of one's sense of the meaning of life, since individuals would go extreme ways by ending their own lives and, in worst cases, would take others' lives as well

by terrorism if they lose their hopes and believe that there will not be another life after death which reunifies the assaulter and the victims to be judged evenly by God.

Therefore, in order to sustain the inner peace of individuals and the harmony of the human society, religious people and thinkers should find solutions to the issues related to VHD, whether raised locally or globally, by comparing and studying other people's understandings of VHD, and if necessary, to revise their own perspective of life and death.

Keywords: Life, death, hereafter, vision, Islam, Japanese beliefs

はじめに

現代社会は、戦争のような人為災害と、地震や津波等の自然災害によって多数の犠牲者が出る困難な時代にあると言っても過言ではない。シリアの内戦や中東各地の紛争で、何百万もの命が失われている。日本でも、東日本大震災において、一瞬にして約2万人の人々が亡くなった。

そのような大事件に際しては、あるいはその後の社会においては、多数の知人や愛する人々の死という苦しみとどう向き合うかという精神的な課題が生じる。そのような問題が扱われる思想体系の一つに、死生観がある。

死生観は、個人の文化と信仰に基盤を持っており、それぞれが自身と他者の生と死、死後に関する恐怖や不安等について考える際に頼るものであるが、信仰の違いと時代によって変化するとされている。また、大きな事件や出来事も、死生観に影響する。現代の中東における紛争も東日本大震災も、それを目撃した人の生と死の考え方に変化を与えたに違いない。どのような変化が生じたかを把握するためには、地域研究とケーススタディーが必要である。それは今後の調査に任せるとして、本小論では、日本の死生観とイスラームの死生観の比較を通して、紛争下の中東社会と東日本大震災後の日本社会が、愛する者の突然の死と向き合う際、一般的にどのような死生観を持つかについて考察する。

本論は、4つの部分から構成されている。第1部では、広義の死生観と、その多様性について論じる。第2部では、宗教における死生観を取り上げ、イスラームと日本人のそれを比較する。第3部は、死生観の中で、特に死と死後の世界に焦点を当てて、死の向こう側に関してどのような信仰と思索があるかを論じる。第4部では、死生観に関する重要なテーマの一つである「来世の実在性」について議論する。

1. 死生観とは

人間はどこから来て、死後どこへ行くか、という難題を解く際の手がかりであると簡単に定義することができる死生観は、文化、信仰、世代、時代によって変化する概念である。一律的な定義が存在しないため、研究者や個人によっても捉え方は様々である。

例えば、人の死に対する思考を「心理」として捉える見方もあれば、思想ある

いは哲学として扱うアプローチもある²。後者によれば、死生観の拠り所は、「この世でしか生きられないという問題」の解決と、人間が生きることの苦しさや死ぬことの恐ろしさの回避のための認識論的な営みである、とされている。

また、宗教に基づく死生観もある。それぞれの宗教によって、輪廻と、動物から人間、人間から動物へと何度も転生しながら生まれ変わるという見方もあれば、運命、世界の終末、死後の復活や審判等の信仰によって構成される教義的な捉え方もある。例えば、イスラームの場合は、神は創造主であるため、人間も含めた万物が神によって創造されたものであり、生は神によって授けられ、死もまた神によって定められている、と信じなければならない。そのため、「死後の復活と来世の存在を信じる」ことは、イスラームの信仰条件の1つになっている。

日本人の死生観が多様化していることから窺えるように、一口に宗教的な死生観と言っても、神道や仏教、キリスト教といった宗教や宗派の違いによって、様々な死生観が存在する。例えば、神道の死生観では、現世における生涯が終わった人は、その肉体は滅びるが、魂は「現世に」残る。その魂は、死後33年間が経った後に、神になると言う。しかし、日常倫理を守らなかった人の場合、死者の魂は、死者の住む地下の国とされる「黄泉国」、すなわち、ある種の地獄に落ちる。一方、仏教の一派である浄土真宗によれば、人は、現世において生きた後、死後は浄土（来世）に生まれ変わると言う。死後どうなるかに関する説明はそれぞれで異なるが、死後の生があるという点においては、考え方が共通していると言える。

非宗教的な死生観としては、現代科学に基づいた解釈が挙げられる。科学的な死生観においては、生を単なる物質的生命として見る傾向があるが（吉田2007）、宗教は、生の根源に、霊魂なり、命なり、1つの原理があると主張している。例えば、神道によれば、人間も自然も、自分で生きているのではなく、命に生かされているという。科学的な観点からは、死は、命の無い状態と定義され、「死ねばすべてがおしまい」と思う人が多い。ある調査によれば、8割以上の人が、病院で死去している³。つまり、死が、日常の中から消えているのである。その影響か、ある調査によれば、ほとんどの人が、「いつか死ぬとはわかっているけど、すぐにとは思わない」と考えている（中川nd）。従って、死の現実性が失われている現代社会に生きる日本人の間では、死後はどうなるかについても関心が薄く、死に対する不安や恐怖の緩和への関心のほうが強い。研究活動においても、死後の世界ではなく、何をもって死亡と判定するかに関心が当てられている。

2 「死を基点とした心理の集合体であり、ネガティブな心理とポジティブな心理を含めた多面的な心理概念として定義する」。(海老根2009: p.194)

3 つまり、人々は、最後を迎える時に、もはや宗教の力に頼らなくなっている。(中川nd)

このように様々な死生観について述べてきたが、死生観においては、生よりも、死とその後に関心が集中する。そこで、本稿においても、死の認識に重点をおく。次節においては、日本社会における死に関わる様々な課題も参考にしつつ、イスラームにおける生と死の捉え方について論じる。

2. 宗教における生と死の捉え方

ここでは、イスラームの一般的な死生観と日本人が持つ死生観との比較を行う。まず、イスラームの事例から始めよう。イスラームにおいて、神の被造物である人間は、神によって与えられた宿命の通りに生まれ、生き、死ぬのであるが、生まれることは生の始まりではなく、死もまた、生の終わりではない。むしろ、生と死は、存在の1つの段階と見なされている。それについて、クルアーンには、次のような章句がある。

かれらは申し上げよう。「主よ、あなたはわたしたちを2度死なせ、2度甦らされました。今わたしたちは罪業を認めました。何とか脱出する道はないですか。」

(クルアーン40:11)

この章句においては2つの生と2つの死について述べられているが、現世において人は1度だけ生まれ、1度しか死なない。この点は、どう理解すれば良いだろうか。一部のイスラーム学者の解釈によれば、最初の死は、現世における死亡である。そして、2度目の死とは墓中での死であり、本当の死はこちらであるという。2度の生の解釈は次の通りである。すなわち、1度目の生は墓中での復活を意味しており、2度目の生は、世界の終末の後の復活のことを指す。

また、1度目の死を魂のない精子状態、2度目の死を現世における死亡と解釈する学者たちもいる。この場合、1度目の生とは、神が精子に魂を吹き込むこと、2度目の生は、神が終末において人間に魂を吹き込むことを指すという。

これら以外の解釈もあるが、イスラーム学者の解釈から言えるのは、死をもつ

てこの世での人生が一旦終わるが、その後も世界の終末後の復活によって、あるいは、それ以前の墓中における再生によって、人間は異なる次元において生き続けるということである。すなわち、死は、生と対立するものではなく、存在の一段階に過ぎない。生もまた、そういった段階の1つである。私たちが「死」という状態は、「死者」とっては、別の次元における「生」になるわけである。

クルアーンにおいては、死後の生について、他にも言及が見られる。殉教者の死に関する次の章句は、その1つである。

アッラーの道のために殺害された者を、「(かれらは) 死んだ」と言うてはならない。いや、(かれらは) 生きている。只あなたがたが知らないだけである。

(クルアーン2:154)

殉教者は、現世に生きる人々には認識できないが、神の立場からは死んでいない、とされている。似たような主張は、預言者イーサー（イエスのイスラームにおける呼称）についてもなされている⁴。

要するに、死を「永世の始まり」と見なすイスラームにおいては、死を肯定的に捉える傾向が見られるのである。来世の存在と死後の復活を信じるムスリムにとって、死は、苦しみの多い現世から脱出して、永生へと至る道の出発点のごときものである。しかし、そのような信仰を有しているにせよ、やはり、死の想像によって惹起される愛する者との別れという恐怖と、愛する者の死によって生じる苦しみはムスリムにもある。それを解消するためには、例えば、スーフイズム（イスラーム神秘主義）において行われる、「死を思う（トルコ語でrabita-i mevt, アラビア語では, rabita al-mawt）」という修行がある。これは、死の前に死を想像するということであるが、修行者は、それによって、自身の死を受け入れることができるようになるという。死の想像のもう1つの利点としては、これが道徳的で良き人生の実現にも役に立つということが挙げられる。と言うのも、イスラームによればあらゆる悪行やあやまちの源は「強い欲望」であるとされているため、死を思うことで人々の欲望が減退し、より道徳的な生き方が可能になるのである。

4 イスラームでは、預言者イーサーの磔と死が否定されている。クルアーンによれば、当時の人々は、イエスを殺そうとしたが、神はイエスを救って天に昇らせたという。それに関するクルアーンの章句は次の通りである。「だがかれらがかれ(イーサー)を殺したのでもなく、またかれを十字架にかけたのでもない…いや、アッラーはかれを、御側に召されたのである。」(クルアーン4:157-158)

日本社会においても、「死の瞑想」がもたらす良い影響が指摘されている。日本人のがん患者を対象にしたある調査で、患者の中で死に対する意識として最も多かったのは、「死は、痛みや苦しみからの解放である」という回答だったようだ。そして、同調査によれば、死を目の前にしても、患者は生に対して積極的になり、生きる意味を見出して、将来を明るく考えるようになったという（中川nd）。

死の肯定的な捉え方が自殺の推奨ではないかと誤解されてしまう恐れもあるので、その点について簡単に述べておこう。近年のムスリムによる自殺攻撃の事実や、ジハード＝「聖戦」という誤解の影響によってか⁵、そう捉えられているのが一般的であるように思われるが、イスラームは決して自殺を正当化していない。クルアーン「婦人章」の第29節において、「・・・またあなたがた自身を、殺し（たり害し）てはならない・・・」と明記されているように、イスラームは自殺を禁止している。「聖戦」において戦死した場合に殉教者とされることに関しては、そもそもイスラームにおいては「聖戦」のみではなく、5つの普遍的な基盤（信仰、理性、生命、子孫、財産）を守るために自分の命を失うと、教義上「殉教者」になるとされているのであり、死ぬことよりも、守ることのほうが重要視されている。従って、死ぬために、あるいは敵によって殺されるために戦うことは、もとより奨励などされておらず、自身の死に他人も道連れにするという「自殺攻撃」は決して認められていない。現代イスラーム世界において、自殺攻撃を行う武装組織が存在することは否定できないが、大多数のイスラーム学者は、自殺攻撃を正当な戦争行為として認めていない。

ここまで、イスラームにおける死について考察した。以下、死後について論じる。

5 「神の正義の戦いでの『殉教』は、死後への思いによって起こると批判される。」（竹内2010）

6 「ジハード」は、しばしば「聖戦」という日本語に翻訳されるが、この訳は言語学的にも無理があり、イスラームの思想にも適合しない部分がある。まず、アラビア語の単語である「ジハード」が意味する範囲は、戦いだけに限られない。と言うのも、クルアーンにおいては、非ムスリムの親がイスラーム教徒の子供をイスラームから逸脱させようとする努力も「ジハード」という単語で記されているからである。従って、ジハードに対して「聖戦」という訳語をあてるのは間違っていると言える。「聖戦」に代わる日本語訳としては、「奮闘努力」が提唱されている。次に、預言者ムハンマドが遠征からの帰路に唱えたとされている「小戦から大戦に戻る」というハディースからも分かるように、イスラームにおいては、戦場での戦いよりも、悪を命じる己との戦いがより重視されており、ムスリムは、敵と対面するよりも、自身の心の中の欲望に耐え、良きムスリムになるための努力をしなければならないと説かれている。

3. 死後の世界

死後の世界について論じる際、しばしば、肉体と霊魂という人間の二重構造的性が言及され、死後の生が魂に帰して説明される。イスラームにおいても、人間のその二重性が「肉体 (badan, jism)」と「魂 (ruh)」という概念を通して説明されるが、一方で「ナフス (nafs)」という別の概念も提示されている。

ナフスとは、人間の生体としての物質的な側面を存続させるために必要な行為の源にある感情（食欲、睡眠欲、子孫を残したいという感情などの動物的な欲求）のことである。肉体の活動力は、霊魂の接触の継続と、それによるナフスという現象の働きである。霊魂が肉体から抜き出されることで、死が訪れることとなる。この点は、クルアーンの「各々のナフスは死を味わうのである (3:185, 21:35, 29:57)」という章句において明記されている。従って、イスラームの観点によると、現世における死とは、肉体の生体としての機能、すなわちナフスの損失に伴う霊魂の離脱であると定義できる。

肉体の死後も残留する霊魂、もしくは霊気は、アッラーによって吹き込まれる生の源とされている。霊魂が肉体に接することで、ナフスが実現する。

肉体から離れる霊魂にとって、死とは、肉体から別の住地への移動を意味することになる。肉体が減じた後も、霊魂は、神によって定められた時空において、世界の終末まで留め置かれる。終末とともに、霊魂も一旦無へと帰されるが、復活によって身体とともに甦える。従って、イスラームにおいては、生と死に様々なレベルがあると言うことができる。

人間の存在の過程には、10の段階がある。第1は、霊魂の世界の状態である。この段階に関するクルアーンの章句は、次のようである。

あなたがたの主が、アダムの子孫の腰から彼らの子孫を取り出され、彼らを自らの証人となされた時を思え。「我はあなたがたの主ではないか」と神は言った。彼らは言った。「はい、わたしたちは証言いたします。」これは復活の日にああなたがたに、「わたしたちは、このことを本当に注意しませんでした」と言わせないためである。（クルアーン7:172）

この状態は、「“Elest Bezmi (『・・・ではないか!』の意味)”」、あるいは

「“Kalu Bela (『…はい、証言します』の意味)”の世界」と呼ばれる。上記の章句の魂と神との間で交わされた会話において、神に帰される「我はあなたがたの主ではないか」という文句のうちの「ではないか」という箇所と、魂の神への回答である「はい、わたしたちは証言いたします」という表現のうちの「はい、証言します」という箇所にその名が由来する概念である。これがどのような状態であるか、またどこで生じたのかについては、クルアーンには詳しい情報がないが、イスラーム学者によれば、神と魂の間で交わされたこの約束は、人間の良心の源である。

第2の段階は、母の子宮内の状態である。ここで、初めて肉体と霊魂が融合する。幼児時代、老年時代がその後の2つの段階として挙げられる。第5の段階は死であり、ここで、肉体と霊魂は再び離れ離れになる。第6の段階は、墓の中の状態である。預言者ムハンマドのこの件に関するハディースも参考にしたウラマーの見解によれば、肉体と霊魂は、墓の中でもう一度融合する。しかし、この融合においてはナフスが付帯していないため、生体は実現しない。魂は、一定期間肉体に宿るものの、その間は、呼吸や食欲といった肉体本来の機能が伴わないとされている。一部の人間が異なる次元で生きているというこの状態は、第7の段階である世界の終末まで続く。終末においては、神以外の一切の存在物が無へと帰る。終末は、現世において生の状態にある人であっても、墓の中の状態にある人であっても、等しく経験するものであるとされている。第8の段階は、復活である。ここでは、3度目の霊魂と肉体の融合が起こる。この段階における霊魂一体化の特徴は、霊魂も肉体も無から創造されるということである。第9の段階は審判である。人々は、神の前で、そのすべての行為をめぐって、神の裁判を受ける。裁判の結果が良ければ楽園に行き、悪ければ火獄に落ちるとされる。

日本人の死後信仰について言えば、死後、亡骸はこの世のものとして滅びる。霊は、別の次元へと上がっていく。しかし、遠くへは行かない。子孫を見守る、高い場所まで昇るのである。次に、仏になるという段階が続く。また、神道によると、死後33年過ぎると人は神となり、一定の年月を過ぎた後に個々の祖霊は個性を棄て、融合して一体となる。1つの原理へと帰した魂の基本的な営みとは、子孫の念願を成就させたり、子孫のために未来を開いたりすることである(石川2009)。

死後という不可視の事柄についてそれぞれの宗教は上記のように説明し、その信者たちの多くがその通りに信じているが、そもそも人間はなぜこのような説明を必要としているか。次節において、その問題について考察する。

4. 来世の実在性

来世とは、存在論的なものであるのだろうか。研究者の間では、この世でしか生きられないという問題が死生観を構成するものである、という意見がある。それによれば、来世とは人間にとって本質的な問題ではなく、むしろ、生の幸せの実感と死の苦痛からの脱却に他ならない。また、来世を相対的な概念として捉える専門家もいる。例えば、次のような主張がなされている。

現世と来世が、本来的に生と死、「今生」と「後生」の概念に対比的に即応されるものである以上、表現上の語法やそれへのかかわりの仕方は二義的なものであって、本質的な意義は「対象化」というところにある。「来世」が本来的にこのような意識構造をもつことにおいて、古来多くの場合、宗教がその教示場面で主導的な役割を果たしてきたのである。(石川 2009)

つまり、研究者によれば、本質的に来世は存在しないということになるが、宗教のそれに対する回答はどのようなものであるか。

仏教では、生老病死の輪廻が苦と考えられ、その悪循環からの解脱が求められている。神道によれば、この世の中には、現世、すなわち「うつしよ」と、幽冥、すなわち「かくり世」がある。後者から前者を見聞きすることはできるが、その逆は不可能である(石川2009)。イスラームにおいて、来世は、万物の死と世界の終末の後に神によって再び創造、再生された後の世界を指す。

上記の仏教と神道における来世論について言えるのは、来世は現世と平行して存在しており、人間個々人の死後に、個別に体験できるものである、ということである。イスラームの場合は、墓の中の生のように、個々人によって体験される部分もあるが、来世は、世界の終末後に、神によって万物が再び創造された後の世界における永遠の生であるため、仏教や神道の来世論とは異なる部分もある。

従って、宗教の来世の存在説と上記の研究者の主張を比較すると、現世と平行して存在する来世説が、研究者による「現世の対象化としての来世」という主張に似ていると言える。しかし、イスラームの死生観の場合は、死後の生が意味する範囲に、現世における生と死の意味を超越する部分も入っているため、必ずしも人間

の死への恐怖の対象化、あるいは、現世の相対概念であるとは言いがたい。逆に、イスラームは、死後世界の存在を、道徳の普及、社会秩序の成立のために利用することが多い。死後の世界があるからこそ、宗教心のある人は獣のような存在にならずに、この世での営みを慎重に行うのだ（ワルド・ライアンnd）。また、がん患者を対象にしたある調査によれば、がん患者は、死と直面する中で、むしろ生きる目的や価値を再認識しつつ死を受容しており、そうであるならば、伝統的・宗教的な死生観の助けはもはや必要とされていないということになる。（中川nd）。

ここまでの議論から、日本の宗教がイスラームと同様、説き方こそ異なるものの、来世の存在を認めていると言える。また、死と死後について考えることを通じて、生に対して積極的になり、生きる意味を見いだすこととなる。しかし、幾つかの調査からも明らかにされているように、日本人の多くは、来世の存在を信じていないか、来世に対する関心を持たないようである。死生観の存在、あるいは死後の存在に対する信仰が、個人の世界観と社会の道徳に肯定的な影響を与えるという点は重要であるため、これらに対する無関心をなくすことが重要である。最後の「終わりに」において、その問題の解決に貢献するために、筆者の案を述べておこう。

終わりに

おそらく、この世で人間が最も希求しているものは、永遠の生であろう。人類が地上に現れて数十万年経っているが、その願望がかなった者は1人もいない。そのため、人間の死への不安は将来も消えることなく、人々は死後世界について知ろうとし続けるだろう。従って、死生観は、文化、哲学、宗教、科学のいずれに基づくにせよ、人間の強い関心をひく分野として残るであろうが、時代による変容に応じて、また震災や戦争などといった大事件による社会の変容に応じて、生と死の捉え方もまた変化していかねばならない。

現代社会は、グローバル化が急速に進んでいるため、死生観においてもグローバルな見方が必要である。なぜなら、様々なコミュニケーション手段の普及に伴って、ある地域の人々が、別の地域で起こった事件とそれについてのローカルな捉え方に関する情報に即座にアクセスでき、それについて考えたり、意見を述べたりすることができるため、相方向的な影響を受けるからである。時に、それによって自らの文化の弱点に気付く場合もあるが、一方で、それが土着文化への関心の低さにつながる場合もある。死生観の事例から言えば、同一の対象に対

する説明の多様性——場合によっては、互いに矛盾することすらある——によって、土着文化の死生観に対する疑問の要因ともなる。それは、人間の不安のうちで最も多いものの1つである死と死後に関する説明の信憑性に、肯定的な影響も、否定的な影響も与えることとなる。先に「死の瞑想」がいかに関人の価値観と社会の秩序の保持に肯定的な影響を与えているかについて確認したが、納得のいく死生観の不在が、価値観の崩壊と社会の混乱を呼び起こす恐れもある。生きる意味の喪失、自らの欲望と怒りに耐えられない個人が自殺に追い込まれ、場合によっては、それに他人をも道連れにするようなテロ行為へと結びつくケースも出てくるはずである。従って、宗教者、あるいは思想家が、異なる地域の死生観の比較をしつつ、地域的な、あるいはグローバルなレベルで見られる諸問題について考察して、答えを提示する必要がある。

本稿では、人類にとって最も難解な謎である死後世界について、日本人に見られる死生観を参照しつつ、イスラームにおける生と死の捉え方、そして死後の世界の信仰について比較を試みた。この成果が材料として、専門家や一般の人々が、自らの疑問の回答が見いだすようになることを願っている。

参考・引用資料

- 石川公彌子「近代日本人の死生観」『死生学研究』特集号、(2009)、18-33。
海老根理絵「死生観に関する研究の概観と展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』48巻、(2009)、193-202。
竹内整一「日本人の死生観について」『死生学研究』特集号、(2010)、16-29。
松本耿郎「イスラームの死生観と馬復初の来世観」『サピエンチア：英知大学論叢（聖トマス大学）』(2009)、143-164。
吉田喜久子「神道の死生観をめぐって—『古事記』の死後観は心情的ニヒリズムか」『藝』（人間環境大学）4巻、(2007)、117-28。
渡辺喜勝、板垣恵子「意識調査にみる現代日本人の『未来』観」『東北大医短部紀要』9(2)、(2000)、245-256。

インターネット：

- 中川恵一（nd）「がんと死生観」『死生観研究会』第17号
(repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/51539/1/da017008.pdf)
ワルド・ライアン（nd）「現在と未来—近現代浄土真宗における死生観の問題について」（http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/26886/3/Iwata_20520055.pdf）